

那珂川町の文化財XXI

安徳地区の遺跡①

～今光・中原・松木～

2013

那珂川町教育委員会

はじめに

明治22年4月30日、町村制^{ちやう せん せい}の施行によって南畑村、岩戸村、安德村の3村が誕生し、その後の昭和31年4月1日には市町村合併促進法^{し ちやう せん}によってこの3村が合併し現在の那珂川町が発足しました。発足^{はつ ぞく}当時は人口が8,948人でしたが、福岡市のベッドタウンとしてや豊かな自然環境をもとめる人たちの定住^{てい じゆう}により、現在は人口が約50,000人に達しています。人口の増加にともなって、数多くの発掘調査が行われ本町の歴史の解明^{かい めい}に欠くことのできない貴重な遺跡が発見されました。この冊子では「安德地区の文化財①」と題し、安德地区の中でも今光・中原・松木で見つかった遺跡^{しやう かい}を紹介します。

今光・宗石遺跡群

今光・宗石遺跡群^{いとな}は現在の安德公園一帯に営まれた縄文時代から中世にかけての遺跡群です。このうち、弥生時代の遺跡としては、甕棺墓^{かめ かん ぼ}と住居跡・土壇・方形周溝が見つかりしています。そのうち、甕棺墓は95基が調査されており時期は中期から後期のものです。なかでも、40号甕棺からは銅でできた腕輪^{うで わ}が4個出土しました。また、当時としては全国で初めて表面を黒く塗った甕棺が見つかりました。古墳時代の遺跡としては住居跡・土壇墓・石棺墓が見つかりました。古代・中世の遺跡としては大溝^{おお みぞ}や火葬墓^{か そう ぼ}が見つかり、大溝からは文字の刻まれた銅鏡^{どう ぐわん}が出土しました。



▲弥生時代の甕棺墓列
二列に並んでいるのがわかります。



◀40号甕棺墓出土状況
四角い墓壇の中に、二つの甕が口を合わせた状態で出土しました。甕の中からは銅釧が出土しました。



◀銅釧(腕輪)
青銅製で、砕けた状態で出土しました。本来の姿に復元するのは無理でしたが、径約7cmの釧が4個あることがわかりました。



▲48号甕棺墓出土状況
口を合わせた部分には粘土で目貼りがされていました。



▲黒く塗られた48号甕棺



▲古墳時代の住居跡
四角い住居跡が並んで見つかります。



▲2号土壇墓(古墳時代)
お供えされた土器と一緒に見つかりました。



▲お供えされた土器
須恵器の坏と土師器の高杯がお供えされました。



▲4号石棺墓(古墳時代)
長さ約2.2m。



▲大溝から出土した銅鏡(鎌倉時代)
上の銅鏡の外側には「原山無量寿院」と刻まれています。高さは上が約3cm、下が約2cm。

貝徳寺古墳

貝徳寺古墳は梶原川右岸の平野部につくられた前方後円墳で、墳丘が大きく削り取られていたため、従来その存在は知られていませんでした。昭和56年度に行われた調査の結果、古墳のまわりをめぐる馬蹄形の周溝を検出し、全長54mの前方後円墳であることがわかりました。石室はすでに壊されて無くなっていましたが、周溝の中からは大量の埴輪が出土しました。北部九州では埴輪の出土例が少なくいずれも貴重な資料です。特に蓋形埴輪は九州で完全な形で残る唯一のものです。また、古墳のつくられた時期は、出土した須恵器から5世紀後半と考えられています。



▲貝徳寺古墳の全景

下の写真に写っている人と比べると古墳がいかに大きいかわかります。



▲円筒埴輪

左は高さ約40cm。



▲蓋形埴輪

高さは約46cm。



▲左から人物埴輪、家形埴輪、壺形埴輪

壺形埴輪は高さ約18cm。

中原・ヒナタ遺跡群

中原・ヒナタ遺跡群は標高約23mの微高地上に営まれた縄文時代後期と古墳時代から奈良時代にかけての遺跡群です。このうち縄文時代後期の遺跡としては、住居跡・土壇・溝が見つかり、住居跡からは大型の深鉢や大量の黒曜石の破片が出土しました。古墳時代の遺跡としては住居跡や土坑が見つかり、住居跡からは炉跡を備え付けたものも見つかっています。奈良時代の遺構としては掘立柱建物・土壇・溝・墓などが見つかりました。このうち、掘立柱建物跡は28棟も見つかり、当時この場所にたくさんの建物が立ち並んでいたことがわかりました。



▲縄文時代の住居跡

丸く掘られ、直径約4.5mで、9.6畳ほどの広さです。



▲出土した縄文時代の深鉢

高さは約40cm。



▲奈良時代の掘立柱建造物跡

柱は腐ってなくなっています。



◀古墳時代の住居跡

四角く掘られ、東西約4.6m、南北約6mで、17.6畳ほどの広さです。



◀奈良時代の木棺墓

中からお供えされた土器が見つかりました。



▲出土した土器

右奥の坏は高さ約6cm。

フヲコモドシ遺跡群

フヲコモドシ遺跡群は標高約22mの河岸段丘上に営まれた、古代から中世にかけての遺跡群です。調査により平安時代のお墓と古代から中世に流れていたと考えられる溝が見つかりました。このうちお墓の中からは一緒にお供えされたと思われる、土師器が出土しました。平安時代のお墓は本町でも調査例が少なく貴重な発見となりました。



▲見つかった溝
深さ約1m。



▲平安時代のお墓
底からは小皿、丸底
坏が見つかりました。



▲出土した土器
左の小皿は高さ約1.2cm。

松木遺跡群

松木遺跡群は標高24mの河岸段丘上に広がる、縄文時代から中世にかけての遺跡群です。縄文時代の遺跡は土壇や溝が見つかり、土壇からは土器や石器が出土しました。弥生時代の遺構は前期から中期初めごろを中心とした住居跡・貯蔵穴・甕棺墓・木棺墓などが見つかりました。特にこの時期の甕棺墓は本遺跡が最も多く見つかっており、本町の弥生時代の始まりを考えるうえで、貴重な遺跡といえます。古墳時代の遺跡は住居跡・土壇・祭祀遺構が見つかり、このうち住居跡は50棟も確認され、かなり大きなムラがあったことがわかっています。また、祭祀遺構からは土製の勾玉、刀子、大量の手づくね土器や高坏などが出土しており、古代用水路として知られている裂田溝に関連する水辺祭祀の可能性をうかがうことのできる重要な発見となりました。



▲弥生時代の貯蔵穴
長さ約1.3m、深さ約1m。



▲出土した土器
左から壺(左)、甕(右)と、蓋形土器(手前)。(左奥:高さ約40cm)



▲古墳時代の住居跡
壁ぎわには竈が作られています。
一辺5.3m、40畳ほどの広さです。



▲竈内の遺物出土状況
ミニチュア土器や土製鏡などが出土し、カマド祭祀が行われていました。



▲弥生時代の甕棺墓群



▲弥生時代の甕棺墓
前期の甕棺墓です。

壺に近い形をしています。



▲竈から出土したミニチュア土器



▲竈から出土した土製鏡(左)と土製勾玉(右)



▲古墳時代の祭祀遺構
溝状で長さ9m、幅3m、深さ1m。

なか ばる とう もと い せき ぐん
中原塔ノ元遺跡群

中原塔ノ元遺跡群は標高約28mの河岸段丘に営まれた弥生時代から古墳時代にかけての遺跡群です。このうち弥生時代の遺跡は甕棺墓・木棺墓・土壙・溝が見つかり、なかでも甕棺墓は58基も確認され、44号甕棺にはへらで絵が描^かかれていました。古墳時代の遺跡は竪穴状遺構が見つかり、そこからは甕・壺・鉢などが出土しました。



▲弥生時代の甕棺墓群
 たくさんの甕棺墓にまじって木棺墓が作られています。



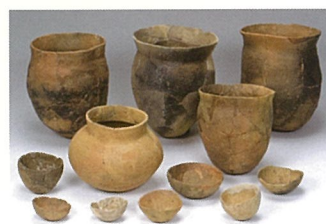
▲弥生時代の木棺墓
 長さ約2.8cm。



▲絵が描かれた甕棺
 甕棺の表面にへらで線画が描かれています。



▲古墳時代の竪穴状遺構
 長さ約2.7m×幅約2.1m。



▲竪穴状遺構から出土した土器
 右奥の甕は高さ約20cm。

こ ぶん
エゲ古墳

エゲ古墳は、那珂川右岸の平野と接する丘陵先端のとても見晴らしの良い場所につくられた古墳です。一辺が約18mの方墳^{ほうふん}で、二段につくられており遠方から見ると上半分を削ったピラミッドのような形をしています。古墳の中心^{わりだけがたもつかん}には割竹形木棺が埋葬されており、棺内からは銅鏡や剣をはじめとする副葬品^{ふくそうひん}がそのままの状態で見つかりました。これだけ豊富な副葬品が大きな盗掘^{とうくつ}を受けず、ほぼ完全な状態で見つかることは珍しく、当時の埋葬の様子を知る上で貴重な資料^{しりょう}となりました。また、出土品から古墳のつくられた時期は4世紀の後半ごろと考えられます。



▲エゲ古墳の全景
 古墳の中央で見つかった割竹形木棺内(矢印)からは、大量の副葬品が見つかりました。



▲四獣形鏡(町指定文化財)
 青銅製の鏡で、四体の神獣が描かれています。(直径約13cm。)



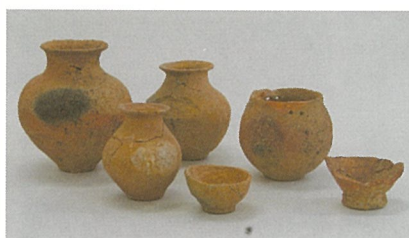
▲副葬品の出土状態
 頭位^{とうい}と思われる部分から鏡・剣・玉が、棺の両端^{りょうたん}に工具や武器が置かれていました。また、鏡は木箱に入れられていたらしく、鏡の下には木片が残っていました。

カクチガ浦遺跡群

カクチガ浦遺跡群は王塚台から松木南交差点一帯に延びる丘陵上に営まれた、弥生時代前期後葉から鎌倉時代にかけての遺跡群です。弥生時代の遺跡は住居跡・貯蔵穴・土壠が見つかり、このうち貯蔵穴は深さ3mを超える大型のものが確認されました。古墳時代の遺跡はお墓が見つかり、その種類の豊富さは町内でも例がなく、また墓地として古墳時代の初めから終わりまで使われた場所はここ以外にほとんどありません。古代の遺跡は氷室と木棺墓が見つかり、氷室は全国的に見ても非常にめずらしいものです。鎌倉時代の遺跡は木棺墓が見つかり、中国でつくられた青磁碗が一緒にお供えされていました。



▲弥生時代の貯蔵穴
深さが3m以上あります。



▲貯蔵穴から出土した土器
壺(左3つ)と鉢(手前)と無頸壺(右奥)。



▲弥生時代の竪穴住居跡
丸く掘られ、東西約4.5mで、13.6畳ほどの広さです。



▲割竹形木棺墓



▲礫床粘土廓墓



▲箱式石棺墓



▲11号墳調査後
竪穴式石室をもつ古墳です。



▲箱式石棺と人骨出土状況
4体分の人骨が見つかりました。

氷室跡▶
氷を保存する施設です。
直径5m、深さ1.5mで、
底はすり鉢状になっています。



▲6号墳調査後
横穴式石室をもつ古墳です。



▲出土した土器
氷室と木棺墓から出土しました。



▲2号木棺墓
底から青磁碗が出土しました。



▲出土した青磁碗
中国からの輸入品です。

カクチガ浦^{うら ごう ぶん}10号墳

カクチガ浦10号墳は、エゲ古墳と同じ丘陵上につくられた円墳です。直径が約25mとカクチガ浦古墳群の中では群を抜いて大きく、墳丘は二段に築かれていました。墳丘の上段には盛土が流れないように「葺石」といわれる石が葺かれていました。埋葬施設は古い形式の横穴式石室で、石室内からは玉類・鉄鏃・刀子・鑿・須恵器が出土しました。また、墳丘上段の葺石部分から馬と家の埴輪が出土しており、それらの出土品から古墳のつくられた時期は5世紀中ごろと考えられています。



▲カクチガ浦10号墳の全景
葺石が残っているのわかります。



▲馬形埴輪と家形埴輪
馬の高さは約65cm。

観音山古墳群^{かん のん やま こ ぶん ぐん}

観音山古墳群は本町の東に位置する観音山の山裾に広がる古墳群で、その総数は250基以上になると思われます。これまで約130基の古墳の調査を行いました。そのほとんどは径10m前後の円墳でした。時期的には6世紀から7世紀にかけてつくられていますが、そのうち6世紀後半のものが大半を占めています。また、本古墳群の中で小型の前方後円墳(中原Ⅰ群1号墳)が発見されており、前方後円墳の小型化と群集墳の盛行を示す貴重な資料となりました。



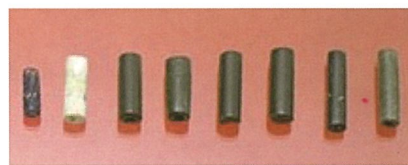
▲観音山古墳群中原Ⅰ群の全景
古墳が密集して作られている様子がわかります。写真の中には28基の古墳が写っています。



▲出土した耳環
金が残っています。



▲切り玉
水晶製です。



▲出土した管玉
右2つはガラス製、残りは碧玉製です。

おわりに

今回紹介した今光・中原・松木で見つかった遺跡は、縄文時代から中世にかけて途切れることなく営まれており、この地が昔から人々の生活の場であったことが伺えます。また、発見の多くは那珂川町の歴史を考える上で欠くことのできない貴重なものばかりです。現在は市街地化が進み、当時の様子をうかがい知ることはできませんが、この冊子を通して、当時に思いをはせていただくとともに、郷土の歴史に触れるきっかけとしていただければ幸いです。

-
1. 今光・鷹取遺跡群
 2. 今光・地余遺跡群
 3. 今光・宗石遺跡群
 4. 貝徳寺古墳
 5. ヲヲコモドシ遺跡群
 6. 中原・ヒナタ遺跡群
 7. 松木遺跡群
 8. 中原塔ノ元遺跡群
 9. カイ子遺跡群
 10. 合政遺跡群
 11. エゲ古墳
 12. カクチガ浦遺跡群
 13. カクチガ浦 10 号墳
 14. 観音山古墳群
 15. 観音山中原Ⅰ群 1 号墳

※赤文字は冊子で紹介した遺跡

那珂川の文化財XXI
安徳地区の遺跡①
—今光・中原・松木—
2013年

発行：那珂川町教育委員会
福岡県筑紫郡那珂川町西隈1丁目1番地1号

印刷：株式会社ディスジャパン
福岡市中央区大名1丁目9番30号
福岡観光ビル3F

今光・中原・松木の主な遺跡の分布

この図は国土地理院刊行の地形図福岡南部・不入道を使用しました。